

令和3年度 地域支援連絡会議要旨

会議の趣旨

コロナ禍という制約のある状況で、工夫を凝らして地域活動を実施してきたことを共有するとともに、この先の活動に活かすためにどんな工夫が必要であるか、目指すべき姿にどのようにすれば向かっていけるのか、建設的なビジョンの共有をしていきたい。

また協働していく切っ掛けやヒントを発見できる場として会議を開催した。

テーマ1 『コロナ禍で工夫してきたこと、またこれからの活動について』

- SNS(ラインなど)を活用し活動継続した
- 対面での活動が制限されたため高齢者への支援に限界を感じた
- 研修会等は、オンラインを活用することで一定の成果があった
- 徹底した感染対策にて、対面活動も実施したが開催者・参加者の双方の合意が前提であり、活動に限界を感じた
- 一旦活動休止した際の再開は、最初の一步を踏み出すのが困難である
- 高層マンションなどの独居者への対応が課題
- 町会加入者や地域活動者の拡大など地域内の広がり、将来世代へのバトンタッチが課題
- あいさつなど顔の見える関係性、地域のお節介屋さんの存在の重要性
- 前向き・積極的な思考で活動を粘り強く継続すること
- 公助に頼り過ぎず、互助・自助により地域活動を進める

テーマ2 『コロナ禍での情報発信について』

- 普及率の高いラインを活用、対象を絞ることで成果があがった
- 対象に応じた ICT アイテムの活用、伝えたい人に有効的に届く方法の模索
- 地域の広報板等の従来の情報発信も有用であり、継続する必要がある
- SNSと並行して、地道なポスティングなどの発信も続ける
- 正しい情報をタイムリーに修正していく
- 高齢者間でのグループラインの活用
- ICTが活用できない高齢者等への対策の必要
- 福祉関係者の地域内での情報発信の担い手の発掘・育成
- 問題点として情報の氾濫と取捨選択
- 口コミの重要性、キーパーソンの存在
- 高齢者・障がい者・独居者など情報弱者への発信方法の検討
- ローカルな情報が、きちんと発信できる方法の再構築

総 括

対面活動の重要性、熱量や想いは対面でないと伝わらない。それが安心感となっており、少しでも集まれる場づくりが大切である。それと同時に、ICTの活用は重要である。ただアクセスしにくい人たちへの情報発信の取組も必要である。行政は、個別に特化するのは難しいため、それを地域の中で形にして声を出し情報共有をしていくことが必要である。またそのような場を作っていくことも大事である。

情報発信について、情報の正確性を見極めるのは困難であり、自分に必要な情報の判断も難しい。なぜ口コミが効果的なのか、自分が信頼している人の情報のため安心ができる。口コミは、信頼や安心や安全が繋がること、情報が伝わっていくのと同時に、その安心感や信頼感というものが紐づけられて橋渡しで広がる結果、口コミで人が集まる。結果的に非常に効果がある。

情報は受け取る側の問題があるため、従来型のポスティングや広報板を使った地道な取組の継続も必要である。模索しながら、非効率の場合もあるが、届けようと努力し続けること。失敗しながら続けていくということが、最終的に多くの人に情報が届いていくことである。

効果について、多くの人たちと模索をして議論することで、真に効果的な地域の情報伝播の仕方が見えてくるものである。今回の会議のような場がもっともっとできればいい、各地域内でも実施していくべきである。

また、地域活動者のモチベーションを保つことも重要である。当事者の疲弊感を和らげることが重要である。様々な活動や課題について意見交換することで、地域で感化されパワーになる。

キーパーソンについて、キーパーソンを探すのと同時にキーパーソンを支える人達の存在、環境、そこに賛同して一緒に活動する他のキーパーソンの人たち、多くの人たちの配慮や声かけが必要、キーパーソンが潰れてしまうことを避けなければならない。

地域資源という言葉には、消費して使ってしまうという意味がある。客観的に見るとその人が地域資源であることは間違いないが、関わる時には、資源化してはいけない。1人の人として向き合うということ、資源化して消費する対象にしてはいけない。地域が崩壊する危険性がある。

最後に地域活動を継続すること。福祉は受ける側、提供する側、そのそれぞれが顔を知った関係であること、つなげていくこと、ずっと続けていくこと、できるだけ長く続けていくことが大切である。